

2016.7.12

平成28年度大学図書館職員長期研修

大学図書館職員の新たな役割

竹内 比呂也

(千葉大学副学長, 附属図書館長, アカデ
ミック・リンク・センター長, 文学部教授
)

大学図書館の基本理念

大学図書館は、今日の社会における知識基盤として、記録媒体の如何を問わず、知識、情報、データへの障壁なきアクセスを可能にし、それらを活用し、新たな知識、情報、データの生産を促す環境を提供することによって、大学における教育研究の進展とともに社会における知の共有や創出の実現に貢献する。

(第63回国立大学図書館協会総会にて採択)

三つの重点領域

- 知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
- 知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
- 新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築

序論

大学図書館をとりまく厳しい環境

必要な知識の入手先という意味
では、大学と書店の重要性は同
時並行的に低下している

吉見俊哉「大学とは何か」（2011）

大学図書館はかつてない競争
にさらされている。

スーザン・ギボンズ

(2013年度大学図書館
シンポジウムでの発言)

大学図書館をとりまく厳しい環境

- 『アメリカの大学では、ライブラリアン（＝主題専門職）という職種が絶滅しようとしている』（石松）⇒（図書館員は単なる書庫の門番としてしか残らない？特に専門教育における主題専門職の役割の低下？）
- 「個別の図書館システム」を必要としない、あるいは図書館を必要としないようなOPAC／図書館システム環境の出現⇒（認証のコントロールさえできれば後は利用者の思うがままに情報源を利用？）
- 「大学内で『場所としての図書館が必要である』と言っているのは図書館員くらいのものである」（D.Schulenburger）⇒（図書館は完全にバーチャル化？）

大学図書館をとりまく厳しい環境

- 「市場化テスト」の波、あるいは私立大学図書館における図書館業務全面委託化⇒（「支援」しかししない職種は大学にとって必要不可欠なものとは見なされない？）
- 「『情報化に対応しない図書館』や『学習に役立つ図書館』を明示的に指向しない大学図書館は大学にとって単なる巨大書庫という不良債権 (!)になりかねない。」（河西）

最近のアメリカの話題

- アメリカ図書館協会での「未来のための組織変革」に関する議論
 - マッギル大学では、大学図書館予算が180万ドルカットされた。180人のスタッフのうち30人が退職したが、その補充はなされなかった。図書館は医学図書館を含む図書館の閉鎖、統合を決めた。
 - ミネソタ大学では、図書館が組織の見直しを行い、パブリックサービス部門を強化して「研究・学習部門」を創設し、主題リエゾン、インスタクショナルデザイン、著作権、データサービスといった専門家により専門性の高い仕事をできるようにするため、新しい管理的ポストを創設した。

最近のアメリカの話題

- アメリカ図書館協会での「未来のための組織変革」に関する議論（続き）
 - マサチューセッツ大学（アマーフト校）では、デジタルリソースをベースとした組織に変革するための自己評価を実施し、ユニークな電子情報資源とサービスの統合を図書館業務のメインストリームとするために図書館業務の様々な面の検討をしている。
 - MITでは2010年に組織改革を実施し、世界中に存在する、休みなく働き続ける学際的な研究コミュニティに対してサービスすることをめざすために情報デリバリー・図書館アクセス部門を設置した。

最近のアメリカの話題

- エモリー大学とジョージア工科大学（いずれもアトランタにある）は、書庫的機能を持つ図書館サービスセンターをエモリー大学の敷地内に設置することを決めた。ジョージア工科大学はその蔵書の95%を新しいセンターに移し、空いたスペースを学習空間として再整備する予定である。

ハーヴァード大学図書館の 新しいミッション

- *The Harvard Library advances scholarship and teaching by committing itself to the creation, application, preservation and dissemination of knowledge.*

(2013)

その1

「研究」から「学修」へ

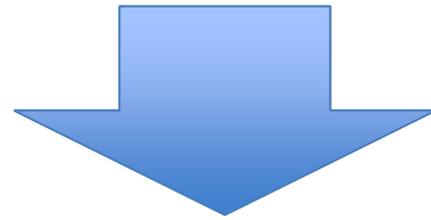
「研究」と大学図書館

- 「電子ジャーナル」の普及は、「図書館」の可視性を著しく低下させた
 - 非来館型利用の増加
 - ILLの劇的な減少，質的变化（REFORMの成果）
 - この現象は電子ジャーナルの購入経費が確保される限りは続く（しかしこれは怪しい？？？同時に図書そのものの電子化はいずれやってくる。）
 - オープンアクセス／オープンサイエンスと大学図書館
- ⇒ ジャーナルの「ゴールドOA化」は大学図書館を不要にするか？

研究から「学修」へのシフト

- 大学院重視の高等教育政策から『学士課程教育の構築に向けて』（中教審答申、平成20年12月）への転換
 - 学習活動の活性化が大学にとっての喫急の課題
 - 「学士力」：課題解決能力の重視
 - 「単位制度の実質化」：事前、事後学習の重視
 - 「教育方法の改善」
 - 「初年次における教育の配慮」
 - 日本の場合、これまでこれを十分にやってこなかったもので、開拓の余地は大きい（新制大学の理念は60年経っても定着していない。例えば「単位制度の実質化」議論）

知識の習得



知識の習得

+

知識活用能力の習得

溝上によれば、これこそアクティブ・ラーニング

高等教育政策における大学図書館

- 学習・教育のサイドから図書館が果たすべき役割についての発言は希薄
 - 「21世紀の大学像と今後の改革方策について」（1998年）では大学図書館について言及されているが、施設・整備の利用が中心。
- 1990年代になってようやく教育改革の機運が高まり、2000年代の教育GPで図書館を取り上げたものが脚光を浴びた（ラーニング・コモンズ）

「学士課程教育の構築に向けて」：
学士力（中教審答申)(2008年12月)

- 専攻分野の基礎知識の体系的理解
- 汎用的技術
 - － コミュニケーション・スキル
 - － 数量的スキル
 - － 情報リテラシー
 - － 論理的思考力
 - － 問題解決力
- 態度：リーダーシップ，倫理，社会的責任
- 総合的な知識，技能，態度の活用と創造的思考力

その後

- 中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（審議まとめ）⇒中教審答申(2012年8月)へ
- 文部科学省「大学改革実行プラン：社会の改革のエンジンとなる大学づくり」（2012年6月）
⇒大学図書館の機能強化について言及

その後のその後

- 教育再生実行会議第3次提言（2013.5.28）
- 第2期教育振興基本計画（2013.6.14閣議決定）
基本施策8 学生の主体的な学びの確立に向けた大学教育の質的転換「学生の主体的な学修のベースとなる図書館の機能強化」
- 国立大学改革プラン（2013.11）
 - 人材育成の機能強化事例

ただし、どのように機能強化されるべきかといった具体策は示されていない。

図書館という「場所」

- ラーニング・コモンズ：単に情報機器が並んでさえいればいい！？
 - 参照『ラーニング・コモンズ：大学図書館の新しい形』加藤，小山編訳（勁草書房2012）
- 「図書館は蜂の巣のような場所」--Sarah Thomas
 - 人の活動を見る。自分の活動を見せる。それによって刺激を受ける。

“日本型”ラーニング・コモンズは、、、

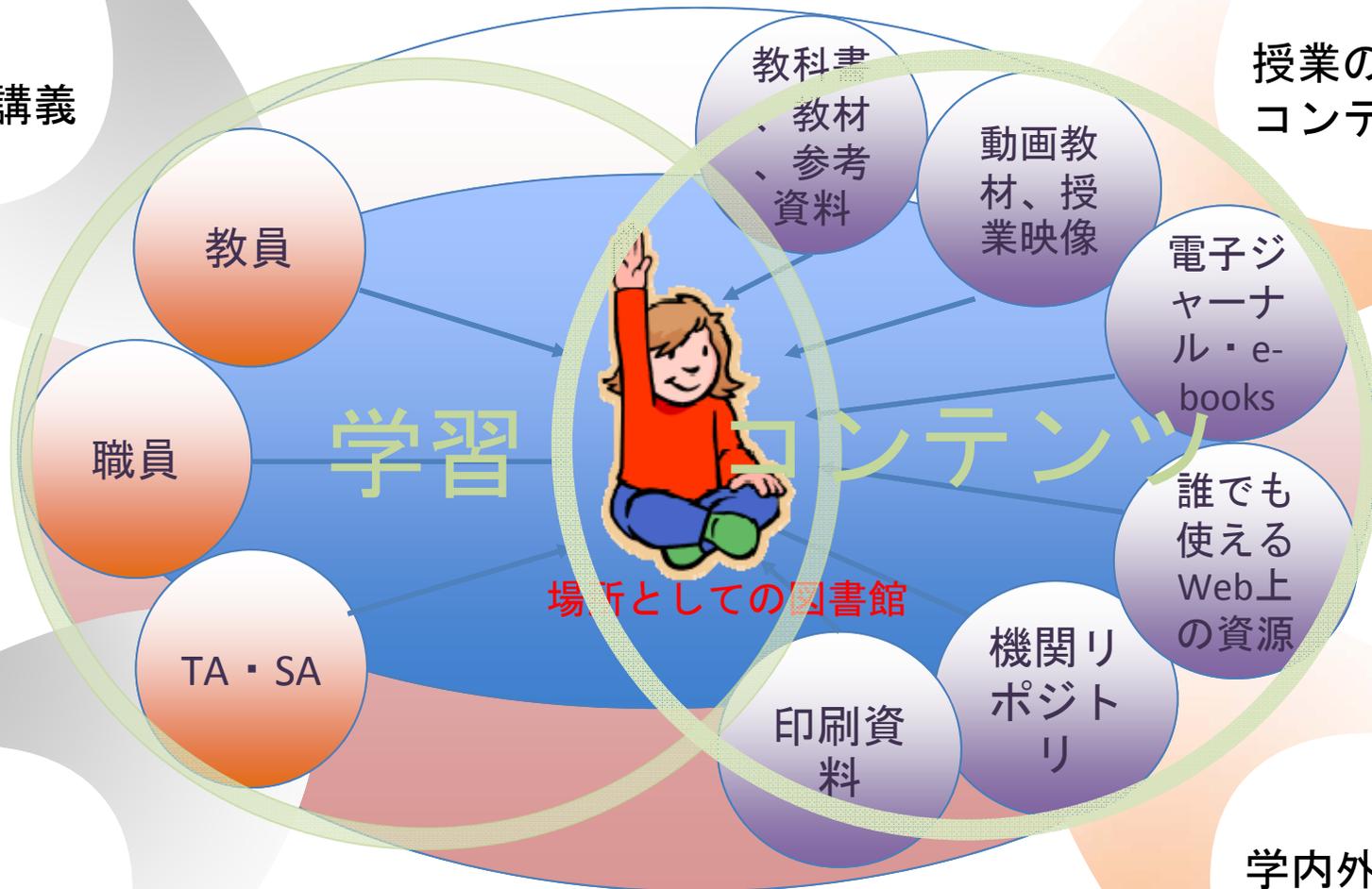
- 単なる空間の提供であるケースが目立つ
 - グループ学習室
 - コンピュータ・クラスター
 - ラウンジ、カフェなどのくつろぎ空間

→ 利用者のニーズには合致しているかもしれないが、そこで働く図書館員の存在（人的支援）はほとんど何も考えられていないように見える。

→ 大学全体の中で図書館機能の再定義がなされないと意味を持たない。

対面型講義

授業の
コンテンツ化



ゼミナール

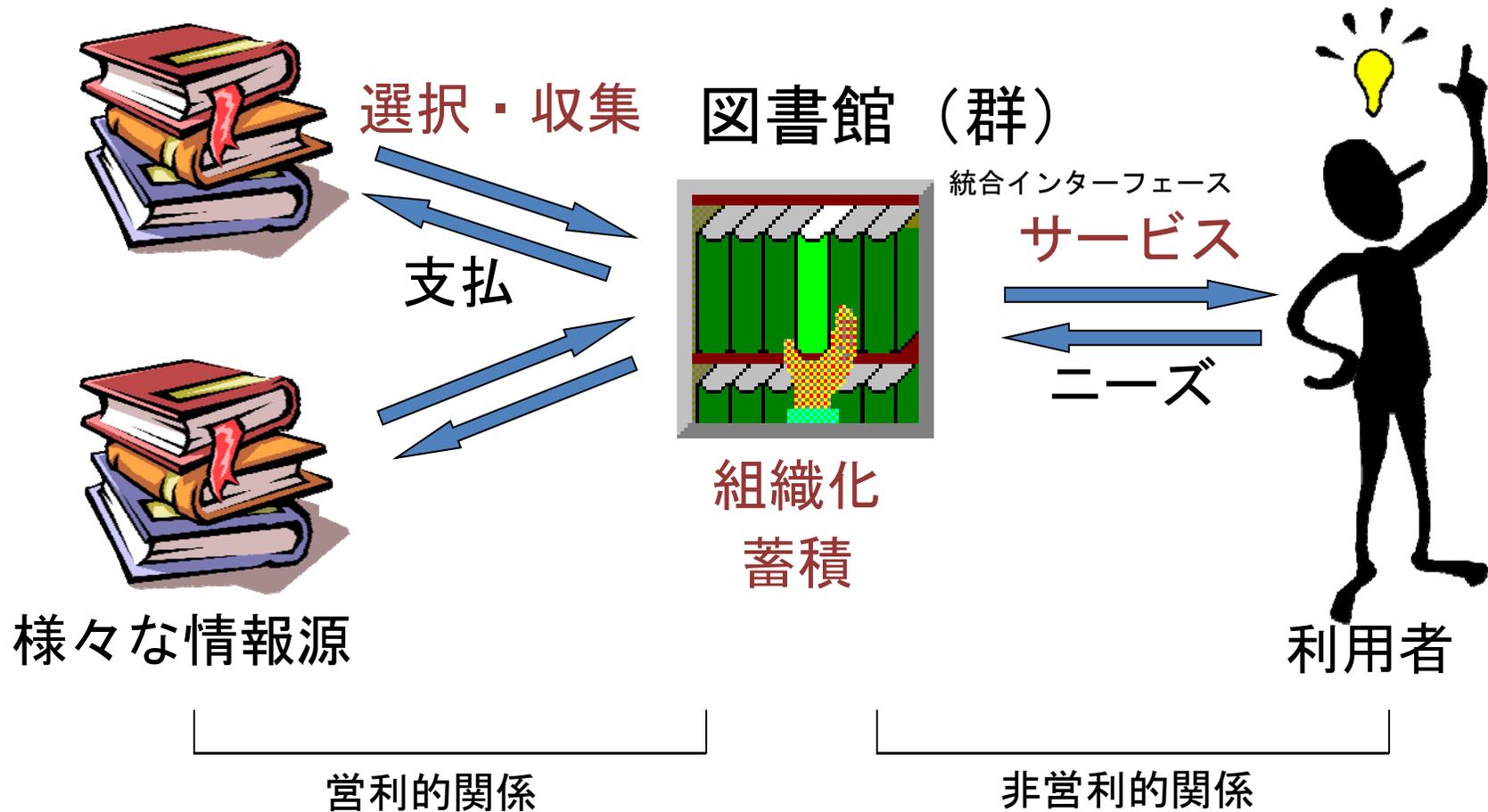
学内外で生産
される研究成果

学生を中心に見た「場所としての図書館」と機能

その2 :

「学習」のための図書館サービス : 回顧

図書館を中心にした 情報サービス理解の枠組み



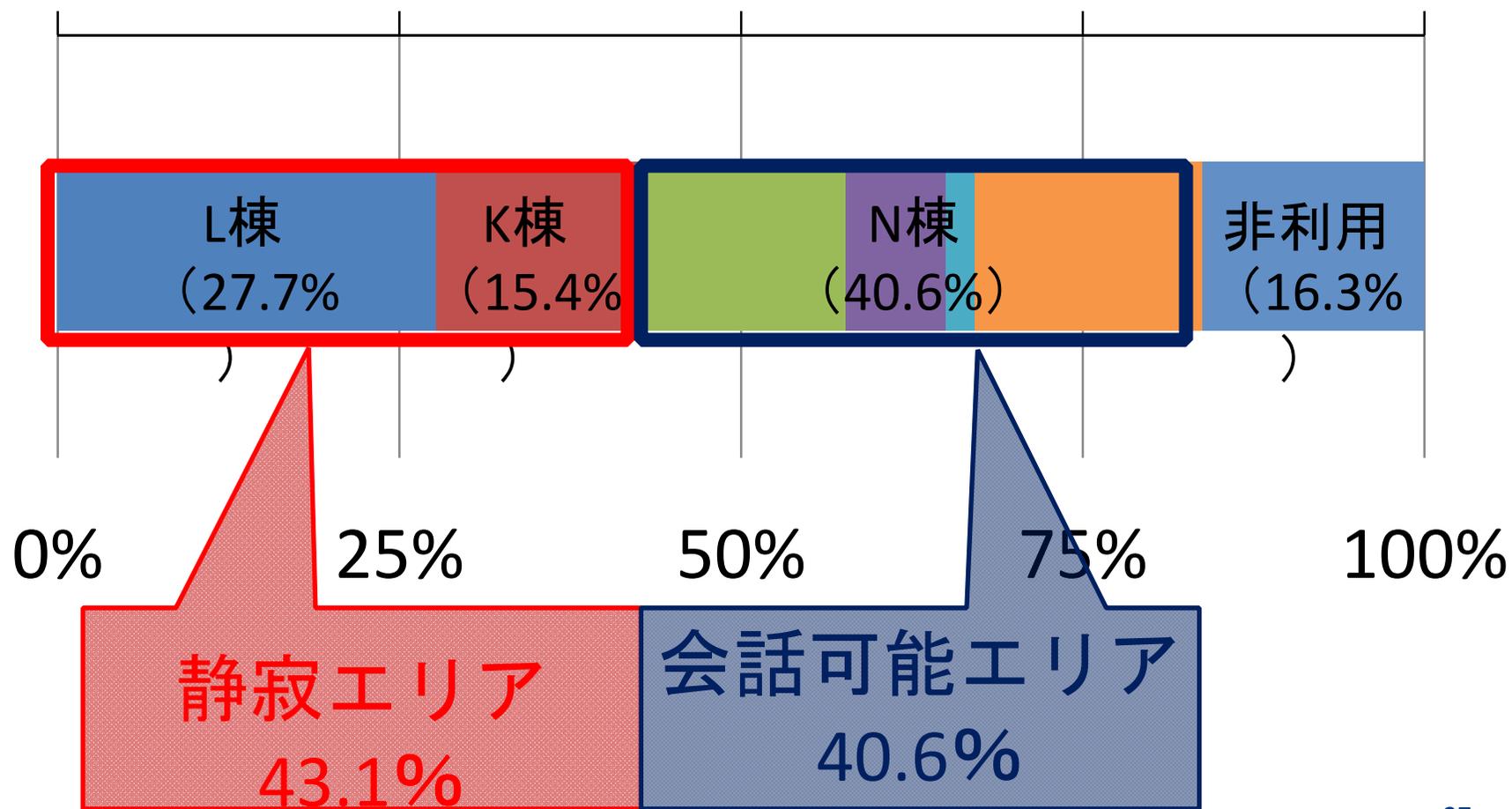
「学習」との関わりにおいてこのサービスモデルはまだ有効だろうか？

- *今の学生は、図書館を発見しているか？
- *今の学生は、図書館で何ができるかを知っているか？
- *今の学生は、図書館員に質問するということを知っているか？
- *今の学生は、図書館に満足しているか？

従来のモデルは有効であるように思われるが、新たなアプローチが必要。そもそも、このモデルにあてはまるようなサービスだけでよいのかという問題。

学習場所についての質問（調査①）

Q：図書館での学習に最も好ましい場所は？



学習をサポートする図書館

- 学習のサポートはこれまでも行われてこなかった訳ではない
 - 1960年代の岸本改革（東京大学附属図書館）
 - レファレンスルームの設置
 - 指定書の強化

これらは成功したと言えるのだろうか？多分言えない。なぜか

その3 ケーススタディ

「アカデミック・リンク」という 思想

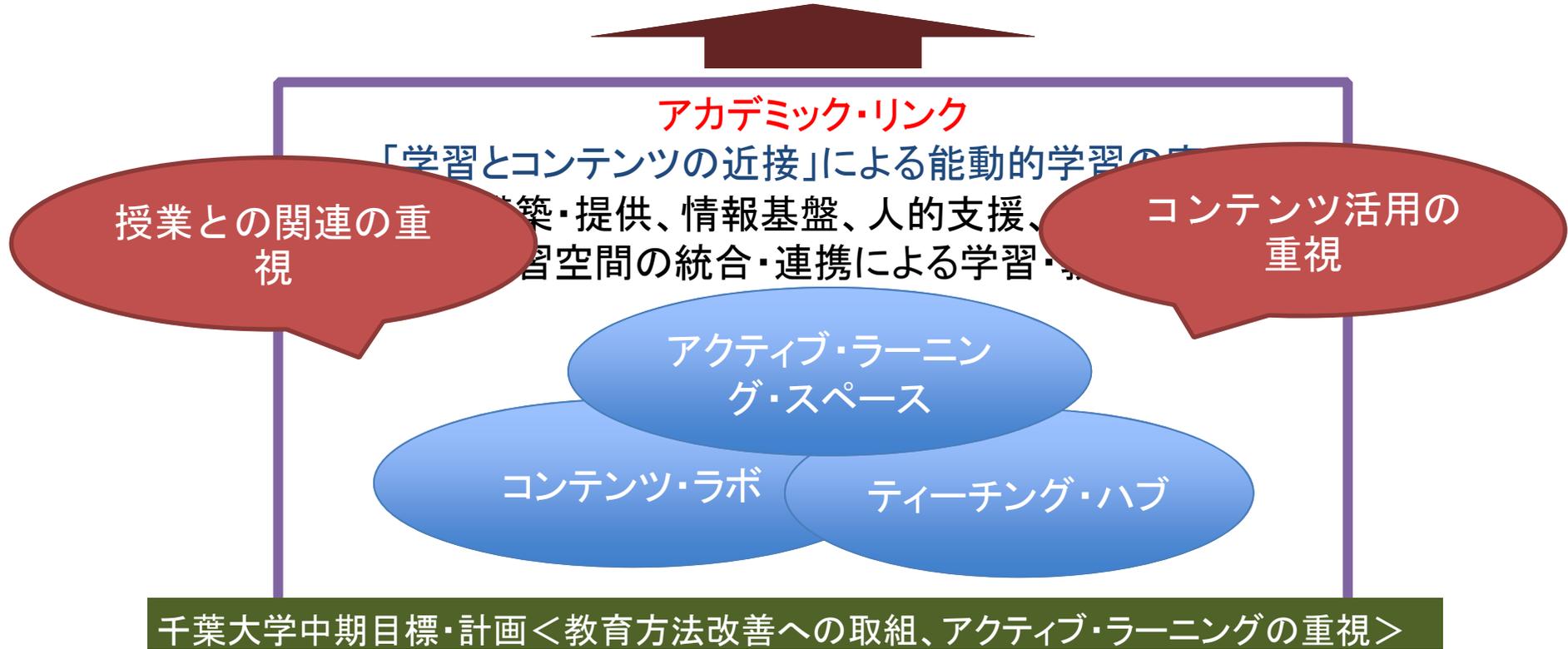
千葉大学では、、、

- リエゾン・ライブラリアン・プロジェクト
「授業資料ナビ」(パスファインダー)
図書館資料と授業を結びつける
普遍コア科目を中心に73科目(2011年度)
- 総合メディアホール(仮称)構想(1990年代末)
図書館資源とコンピュータ資源のより密接な連携
→これはすでにより意味を持たない?

アカデミック・リンクによる千葉大学の教育改革

目的:「考える学生の創造」

「生涯学び続ける基礎的な能力」「知識活用能力」を持つ学生の育成



大学に対する社会的要請

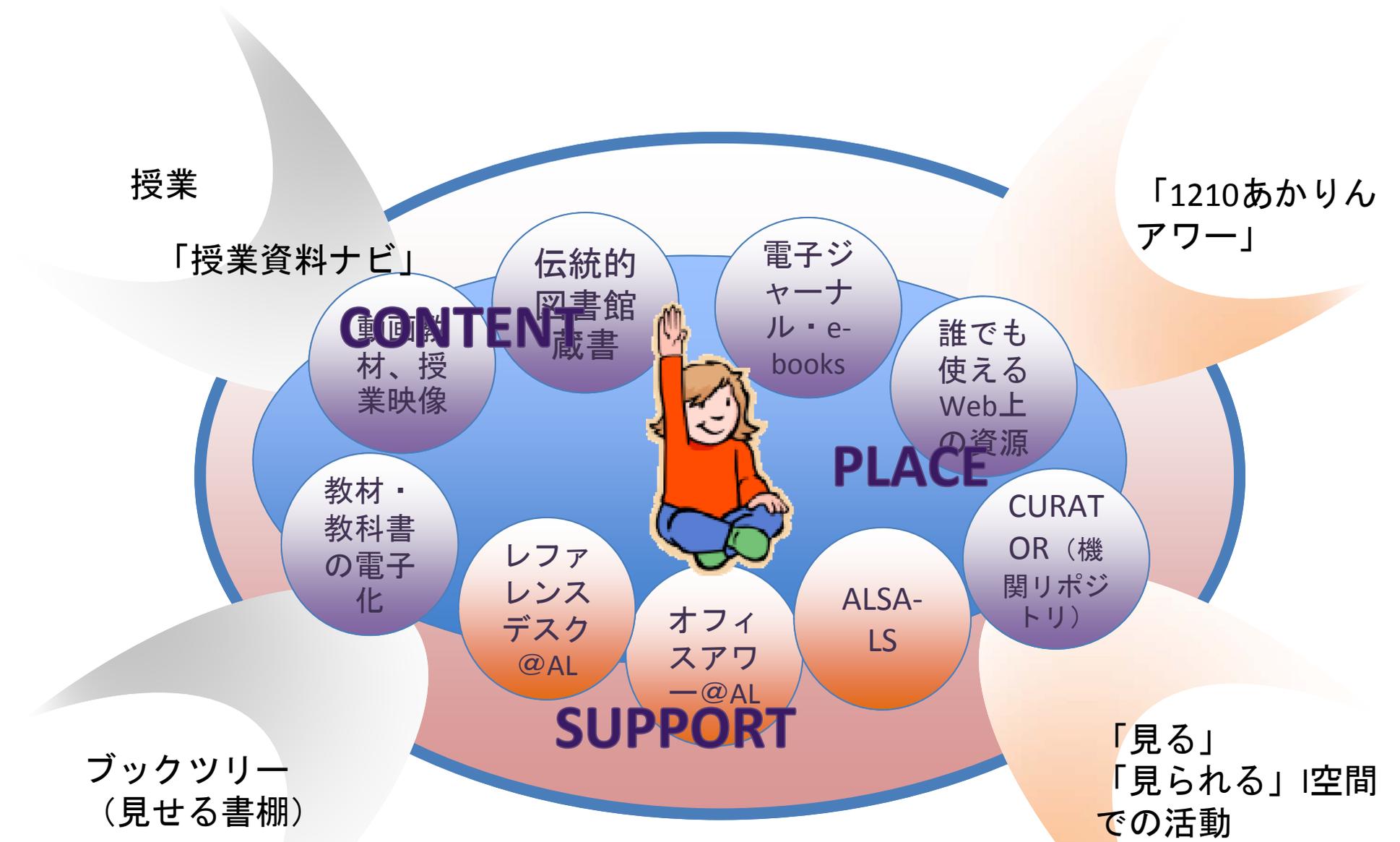
- 知識基盤社会、学習社会における市民の育成
- 高等教育のグローバル化の中での質の維持・向上
- 職業人としての基礎能力、創造的人材の育成

「学士課程教育の構築に向けて」(平成20年12月24日、中教審答申)

学生のニーズ

- 自由に使える学習スペース
- 文章作成力、ディスカッション能力、問題解決能力¹
- 英語によるコミュニケーション能力

「千葉大学の教育・研究に対する意識・満足度調査報告書」(平成21年度)

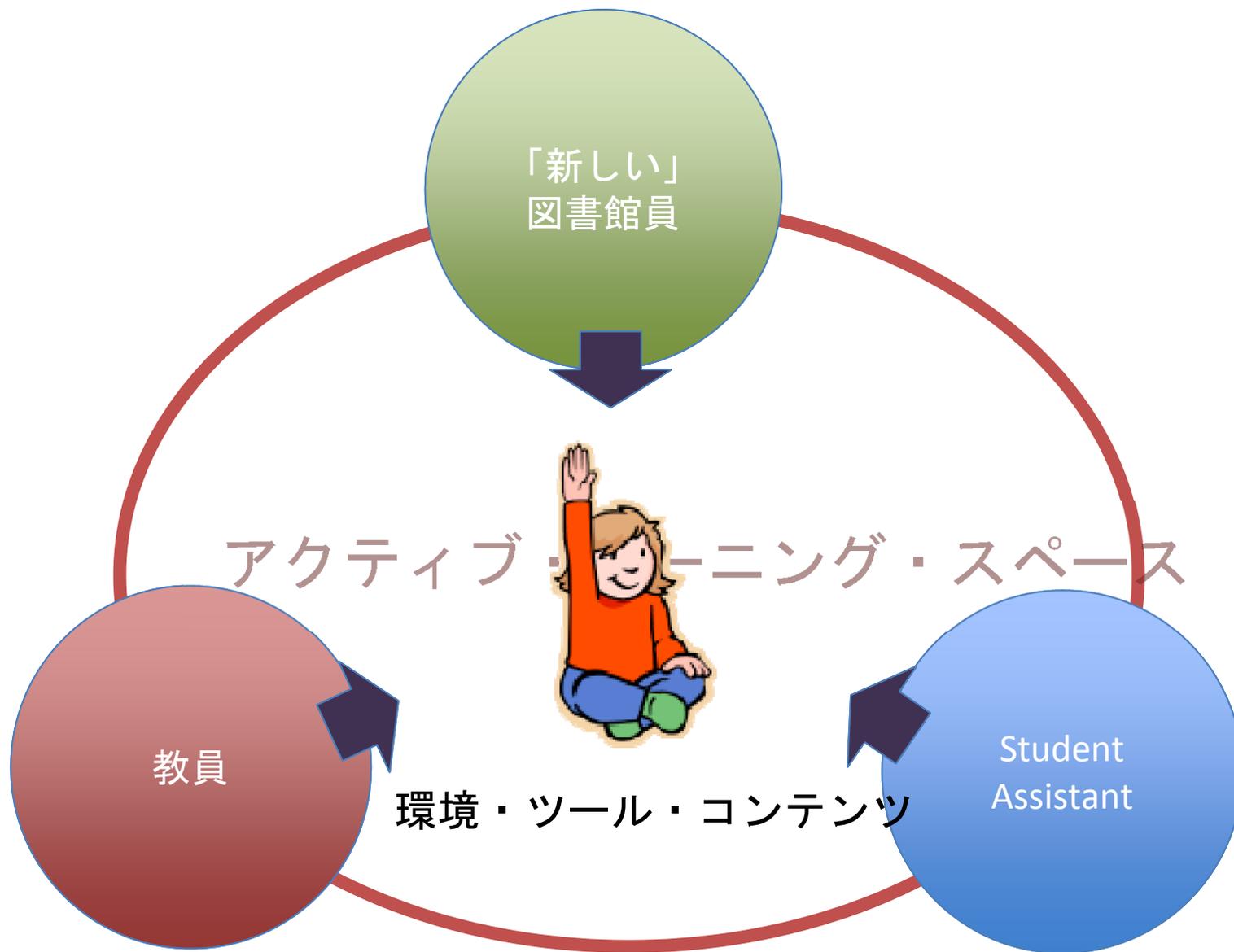


学生から見たアカデミック・リンク

「学び」に導く刺激にあふれた場所，学びの基盤としてのコンテンツ，人的サポー

各プロジェクトの概要

プロジェクト名	概要
「レガシーコンテンツ再生」プロジェクト	すでに刊行されているパッケージ型メディア(図書、ビデオなど)の電子的再生と学習における利活用のための提供環境を整備する。
「デジタルコースパック」プロジェクト	自作教材、著作物の一部など、これまで教室での配布にとどまっていた授業資料の電子的パッケージ化を実現し、提供環境を整備する。
「オンラインクラスルーム」プロジェクト	授業の動画配信を中心とするe-learning環境を整備し、実施する。
「情報利用行動定点観測」プロジェクト	学生の学習行動と学習成果の関連を、情報利用行動と学習／生活空間の利用状況から継続的、横断的に検証する(調査の実施、分析)。
「参加する学習」プロジェクト	アクティブ・ラーニング・スペースでのコンテンツを利用した「学生による学生のための学習相談」を実現し、そのためのアカデミック・リンクによる体系的SA研修を構築する。
「教育力」・「学習力」向上プロジェクト	学生、教職員によるアカデミック・リンク機能についての理解と活用を促し、学習、教育にかかるスキルの向上を実現する(セミナー、シンポジウム、FDの実施)。
「新しい図書館員」プロジェクト	学習に関与する新しい図書館員概念を確立するとともに、彼らを中心に、教員、図書館員、学生の協働を基礎とする個別的学習支援モデルを構築し、実施、評価する。



その4 ささやかな本論

大学図書館員がこれから強調すべき新たな役割

学修サポートの方向性

- 「学生に望まれる学修サポート」はどのような方向にあるのか？→学修そのものへの関与
 - 例えば、キングスカレッジ図書館の”Research Support”
- 授業との密接な連携
 - 「授業資料ナビ」（千葉大学）：授業単位のパスファインダーの作成、教員と図書館の連携の基づくもの。
- 「一対多」ではなく「一対一」になるようなサービスの提供
 - 例えば、レポート執筆を支援するライティング・センター
 - これらの前提として、図書館員は匿名であってはいけないのではないか？
 - カウンターの中にとどまっていけない。

「研究」との関わり

『我が国におけるオープンサイエンス推進のあり方について』（2015年3月，内閣府，国際的動向を踏まえたオープンサイエンスに関する検討会）

公的研究資金による研究成果（論文、研究データ等）の利活用促進を拡大することを我が国のオープンサイエンス推進の基本姿勢とする。

★国立国会図書館，大学図書館の役割への期待が表明されている。（長期保存の担保）

「研究」との関わり

- 大学における研究データ管理を誰がどのように行っていくか
- URA機能との関係（URAこそ図書館員の次の仕事？）
- 図書館の仕事か，図書館的なスキルを持っている人の仕事か？

「資料提供／利用形態」に基づく サービス類型化からの脱却の必要性

- テクニカル・サービス／パブリック・サービスでは効率的なサービス展開は不可能
 - 利用者のタイプとニーズによる類型化か？
 - 研究者を対象とした業務／学生を対象とした業務
 - それ以外に組織としての図書館の管理業務

組織の形態

- 「専門職」組織は本質的にフラットでなければならない。
- 組織管理業務は本質的にフラットではできない。
- 従来の大学組織との整合性は？
 - 「専門職」部門は限りなく教員組織と近くなる

さて、当面の課題

- これまでやってきた業務は当面残ると考えざるを得ない（先細りとはいえ）
- 今後の発展可能性がある新しい仕事はどんどん出てきている→「キューレーション」「ファシリテーション」
- マンパワーは限られている

⇒ プライオリティに基づく仕事の選別しかない

とりあえずのまとめ

- 図書館で行われる人的支援の中心は学生の能動的学修（あるいは学生のリサーチ）のサポートである
 - 単なる利用指導を超えて、ライティングセンター機能によるアカデミック・ライティングの指導→図書館員の教員化か？
 - 「ご用聞きライブラリアン」による多様な支援
 - リエゾン・ライブラリアン（教員との連携の強化）
 - 多様な人材のとりまとめ
 - 学習用コンテンツ（教材）の構築＝ライセンス処理を含む

人的学修支援の考え方

- 大学において学修をサポートする人材は図書館員だけではない
 - 学生（TA,SA=ピア・サポート）
 - 教員
 - 伝統的な意味での図書館員とは異なるスキルを持つ職員

多様な人材が混在することによって新しい図書館はじめて機能する

人材の多様性の必要性

- コアとしての図書館情報学の基礎知識は当然必要。
 -
- しかしそれしかないと多分困ることになる。
 - 多様な人材を備える必要性
 - アウトソーシングは「最低ライン」の仕事をこなすためにあるものであって、全面的なアウトソーシングは「大学」にとって自殺行為に等しい
 - しかし、同時にアウトソーシングしなければ、必要なサービスを提供するための人材の集約化はできないだろう

これからどうなる！？

- 図書館員の役割は当面広がると考えるべき
 - なぜなら、アメリカの大学図書館にくらべると、日本の大学図書館はたいしたことをしてこなかったので、新規開拓の余地があるから。その新規開拓が今日の大学にとっては重要。
- しかしながら、際限なく拡張することは不可能であり、あるターニングポイントで縮小の方向に動くことになる
 - なぜなら、図書館以外の場所で、これまで図書館がおこなってきたことの多くが実現してしまう可能性があるから。

これからどうなる！？

- 「全面的な図書館業務外部委託」により、短期的に経営上の問題が解決したかのように見えるが、いずれ大学全体を蝕み、大学の本質そのものを破壊する
- しかし、図書館における人材の集約化と高度化は必要であり、そのために周辺的な業務の委託は必須
- 図書館員の役割として「何を残して何を捨てるか」を見極めることができる大学（図書館）と図書館員だけが生き残ることができる

「専門学位を有したライブラリアン」

- 平成26年度の文部科学省による「スーパーグローバル大学創成支援」の公募要領には、ガバナンスの観点から事務職員の高度化に取り組んでいるかをたずねる項目があり、そのなかに「**専門学位を有したライブラリアン**」が例としてあげられている。同要領のQ&Aによれば、これは図書館情報学の資格や学位に加え、別途自らの関心に基づく学位を有し、教育・研究支援をはじめ大学図書館全体のマネジメントができる職員を指している。

まとめ

- 大学図書館員が持つべき「コアとなる知識・スキル」の再定義が必要
 - 大学図書館専門職とは何ができる人の集まりか
 - それをどのような形で養成するのか
 - 大学における大学図書館員の位置づけ

「大学のミッションを実現するために、図書館（員）は何ができるかを考える」

大学図書館の基本理念

大学図書館は、今日の社会における知識基盤として、記録媒体の如何を問わず、知識、情報、データへの障壁なきアクセスを可能にし、それらを活用し、新たな知識、情報、データの生産を促す環境を提供することによって、大学における教育研究の進展とともに社会における知の共有や創出の実現に貢献する。

(第63回国立大学図書館協会総会にて採択)

国立大学図書館協会ビジョン2020 解説

http://www.janul.jp/j/organization/minutes/research_meeting/janul-2020vision_commentary.pdf

ぜひ読んでください！